被災地を支えた生協の底力

～被災地3県・生協理事座談会

岩手県、宮城県、福島県の被災地3県の理事に集まっていただき、座談会を開催した。震災直後の周辺の被災状況や、その後行なった被災地での組合員活動、さらに全国の生協からの被災地支援についてなど、この1年間を振り返っていただいた。

（司会をみやぎ生協の齋藤理事長にお願いしました）

震災直後、多くの職員が食料の供給を続けた

みやぎ生協理事長
齋藤（さいとう） 昭子（あきこ）さん

齋藤（司会―みやぎ生協） 2011年3月11日の東日本大震災から1年になります。ここに集まっていただいた被災地3県の理事も、さまざまな経験をされたと思います。まずは震災発生直後、当事者としての体験をお聞かせください。

飯塚（いわて生協） 震災発生時、岩手県大船渡市にある、けせん支部に居て、尋常ではない揺れを体験しました。家の状況が心配になり、「また戻って来るからね」と職員の女性に言い残し、支部を後にしました。

幸い、家の被害は大したことはありませんでしたが、間もなくして津波が押し寄せました。私の家は高台にありましたが、坂の下まで津波が来たため、水が引くまで高台から降りられず、支部に戻れなくなりました。「支部の職員を置いて出るべきじゃなかった」と、激しい後悔の念に襲われましたが、3日後、支部長が訪ねて来て、「支部は津波の被害を受けたが、職員は避難して無事だ」と教えてくれました。

次第に震災の被害状況が分かり、隣の陸前高田市が壊滅的な被害を受けたことを知りました。私の住む大船渡市の被害も大きく、津波の被害を受けず家が残ったのは2、3の町だけでした。

高橋（みやぎ生協） 私が地震に遭ったのは、宮城県大崎市の田尻駅近くの集会所で「産直実務者会議」を行なっていたときです。非常に大きな揺れで、外に出て地面に這いつくばってこらえ、周りでは地割れも起こっていました。揺れが落ち着くと、車に乗

岩手県宮古市の鍬ケ崎（くわがさき）公民館。（2011年11月15日撮影） ©山田省蔵

宮城県の気仙沼向洋高校の校庭に取り残されたピアノ。（2011年12月11日撮影） ©山田省蔵

福島県相馬市。左側奥の煙は昨年末に復旧した火力発電所のもの。（2012年1月17日撮影）
©山田省蔵

り合って帰路につき、途中大富（たいとみ）店に立ち寄りました。停電でレジも使えない中、自家発電で明かりを確保し、100円や200円など切りのいい価格で、職員が組合員に懸命に商品を供給していました。

仙台市若林区の自宅に着いたのは深夜でした。家の前の松が流されていて、すぐ近くまで津波が押し寄せていたことが分かりました。津波警報が鳴り響く中、子どもたちと共に、近隣の小学校の最上階に避難しました。そこから、名取市閖上（ゆりあげ）の火災も目撃しました。

渡邊（コープふくしま） 私は福島市のコープマートいずみの1階にある会議室で、理事会の真っ最中でした。だんだんと揺れがひどくなり、しまいにはテーブルも倒れるほどでした。部屋から出ると、店舗2階のスプリンクラーの配管が脱落して、水が流れ出ていました。

私の自宅は沿岸部の相馬市にあり、冬は山道が凍るため、福島市まで電車で通っていました。しばらくは家に帰れないと覚悟しながら、福島市のコープマート新町に移動し、店頭販売を手伝いました。その後、貴重なガソリンでしたが職員に車で送ってもらい、自宅に着いたのが夜10時過ぎでした。家には、娘と義母が居ました。息子は仙台に居て、友人の家に身を寄せ、主人は職場が避難所になったため10日ほど戻ってこられませんでした。食料は生協で買ったストックがあったので、しばらくは家にこもりきりの生活になりました。

「何かしたい」気持ちから組合員活動が始まった

齋藤 地震と津波により情報が途絶え、ライフラインも断絶しました。そんな状況の中、「何かをしたい」という気持ちから、組合員たちが集まり、各地でさまざまな活動が行なわれました。皆さんのところでは、どんなことに重点を置いて取り組んでこられましたか。

飯塚 食料のストックが少なくなる中、「在宅避難者に食料をお届けしなければ」という使命感に駆られました。私の住む地域には生協の店舗がないので、本部と連絡を取り、移動販売を始めました。「震災後初めてお金を使った。普通の生活みたいでいいね」とおっしゃる方、津波で奥さまを亡くされ、「何を買っていいか分からない」と言う年配の男性。仮設住宅で引きこもり、「生協さんが来るから出てきたよ」というおばあちゃんもいました。

いわて生協理事
飯塚 郁子（いいづか いくこ）さん

全国の生協の仲間が駆け付け、支部の泥の掻き出しをしてくれました。ただ、正直に言えば、「またここでやっていけるのだろうか……」という気持ちもどこかにありました。それほどに、地域は破壊し尽くされて、絶望的な状況だったのです。少しずつ生活が復旧し、今は、仮設住宅での「ふれあいサロン」や、在宅避難の方からの要請に応じた物資のお届けなどが主な組合員活動になっています。支部の周りをきれいにしてもらえたから、こうして活動ができていると、今あらためて感謝の気持ちでいっぱいです。

高橋 まず最初に行なったのは、避難所で必要なものを聞き、それを集めてお渡しすることでした。その後、全国からたくさんの支援物資をいただいたり、近所から集めたりしながら、チャリティーバザーを数度にわたって開催しました。

被害の大きかった、みやぎ生協・六丁の目店（仙台市若林区）では、4月末から店頭販売が始まりました。店舗再開の期待を込め、みんなが元気になれるイベントをと、お祭りを2回開催し、8月20

日、ようやく再開店にこぎつけました。仮設住宅での「ふれあいお茶会」や、被災者を招いてのチャリティーコンサートなど、さまざまな活動を継続して行なっています。

みやぎ生協が開催した「子育てひろば」のクリスマス会。

渡邊　私が担当するのは、福島県相馬市と南相馬市を中心とする相双支部です。南相馬市は東京電力福島第一原子力発電所から近く、緊急時避難準備区域に指定されています。津波の被害や放射能の影響から、委員も半分は避難しました。

そんな中、少しでも食品をお届けするため、3月28日に相馬市で青空市を開催しました。生鮮食品の入手が困難でしたが、本部になんとか調達してもらい、冷凍食品の野菜も使いながら豚汁を振る舞うことができました。その後、放射能学習会や生産者支援に取り組み、仮設住宅での茶話会は、現在も継続して取り組んでいます。そして、福島に住み続けられるように、放射性物質の除染作業を積極的に推し進めようとしています。

全国の生協からの被災地支援に感謝

齋藤　今回の大規模災害では、日本生協連がコーディネートし、全国の生協から多くの被災地支援が行なわれました。被災地では、そういった支援はどのように映りましたか。

飯塚　岩手県内ではコープさっぽろやコープあおもり、秋田県北生協をはじめ、全国の生協のさまざまなトラックが走りました。組合員の中には、「日本全国にこんなにたくさんの生協があるとは知らなかった」と驚いていた人も多くいました。しかし、デザインこそ違えど、CO・OPのマークが入った生協のトラックは、どこか安心感をもって地域に受け入れられたようです。

CO・OP共済のお見舞い活動でも、全国から支援に来ていただきました。その対応が素晴らしいと、たくさんの感謝の声が届きました。中には、「どうしてあんなに親切にできるのか。自分もセールスの仕事をしているが、あんなふうに仕事をしてみたい」と感動を直接伝えに来てくれる方もいました。被災地での活動は、生協全体として、本当に大きなアピールにつながっていると思います。

コープふくしまが相馬市で開催した青空市（3月28日）。

高橋　全国の生協から多くの支援物資が届き、避難所でも生協の商品がたくさん配られているのを実感しました。今でも、「○○生協のあの商品がおいしかった」など、全国の生協の名前を耳にすることがあります。また、コープこうべのボランティアバス先遣隊をはじめとして、多くの生協職員が、宮城県に駆け付けてくれました。そして、ふれあい喫茶の運営、炊き出し、店舗の復旧、仲間づくりなど、さまざまな支援をしていただき、中には、カキの養殖のいかだ作りなど、生産者への直接的な支援もありました。生協のつながりの素晴らしさを実感しました。

渡邊　私のいる地域は、放射線や津波の影響から避難した人が多く、約4,000（OCR用紙ベース）あった組合員世帯数は激減し、一時期は700世帯前後まで落ち込みました。全国の生協の皆さんに仲間づくり活動を助けていただき、今は3,000世帯にまで回復しました。

さいたまコープには毎月2回のペースで、南相馬市の仮設住宅でふれあい喫茶を開催してもらっています。また、福島

ことができ、被災地生協の組合員や職員の無事を知ることにもつながりました。

復興までの道のりを見守っていてほしい

齋藤　被災地に直接行ったり、募金をしたり、全国各地に避難する被災者に手を差し伸べたり、被災地支援の形はさまざまです。今後、全国の生協にはどのような支援を期待しますか。

飯塚　先日参加させてもらった「地域包括ケア会議」の報告によると、行政の職員をはじめ、医者、看護師、保健師、理学療法士といった被災者を支える人たちが、心身ともに疲れているといいます。生協の職員も、献身的に被災者支援を行なっています。支援者が元気でなければ、被災者は支えられません。支援者の心のケアを考えることが、今求められていると思います。

また、全国の皆さんにお伝えしたいのは、「手を離す」ことはしてもいいと思いますが、「目を離す」ことはしないでほしいということです。「手を離す」ことは自立につながりますが、「目を離す」ことは見放すということです。全国の生協が見守っていてくれる、そしていざというときに助けてくれる。そんな温かいまなざしを感じながら復興に取り組んでいきたいと思っています。

高橋　時間がたつにつれ、少しずつ震災が過去になっていきます。私自身も、ふとした拍子に、震災を遠い昔のように感じることがあります。そんなときは、まだ震災の傷跡が残る荒浜の景色を眺めます。支援団体の数も少しずつ減っていき、マスコミの被災地報道も少なくなってきています。だからこそ、地域に根差した活動をする生協は、被災地を忘れず、応援の気持ちを持ち続けて、長く被災地の支援を続けていってほしいと思います。

みやぎ生協理事
高橋 朋子（たかはし ともこ）さん

渡邊　福島県は、地震と津波の被害に加えて、放射能の問題を抱えています。お願いしたいのは、学習会を開催するなどして、正しく理解していただくことです。現在、放射性物質は、福島以外の場所にも飛散し、福島県だけの問題ではなくなっています。多くの人に正しい知識を持ってもらい、報道に翻弄（ほんろう）されないでほしいと思います。それが結果として、福島を救うことにつながります。

いわて生協が陸前高田市で開催した、礼服提供会（8月4日）。

齋藤　被災地へ支援に来られた方の感想文を拝見し、支援活動は、支援する側もされる側も、ともに人間として高め合えるものだと感じました。また、皆さんのお話を伺って、「人は一人では、人として豊かに生きられない。だからつながりが必要である」ということをあらためて思いました。

震災復興には10年以上かかるといわれています。今後も全国の生協に、継続した被災地への支援活動をお願いできればと思います。そして万が一、次の大災害が起きたときに備え、全国の生協の「つながりの力」を、より生かせる仕組みづくりが必要だと切に思いました。本日は、ありがとうございました。

（文　野口 武／写真　五味明憲）

の子どもは、野外活動をしたり、自然のものに触れたりすることが制限されています。そんな中、コープおおいたには、保養プロジェクトとして、福島の子どもたちを大分県に招いてもらったり、松ぼっくりを送っていただいたり、子どもたちが自然に触れる機会をつくってもらっています。

コープふくしま理事
渡邊 洋子（わたなべ ようこ）さん

『CO・OP navi』誌にも、被災地の情報を継続して取材いただき感謝しています。そこで掲載される情報から、全国の生協の被災地への取り組みを知る